
ささやかな願い

藍衣硝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ささやかな願い

【コード】

N6390U

【作者名】

藍衣硝子

【あらすじ】

織川京（28）は困っていた。いつもなら上手にあしらえるのに、その男にはダメージを与えられないことに。そして怒ってもいた。心の中深くまでずかずか入り込み絡めとろうとすることに。男はいう。私の過去も、現在も、未来も、その体もそして心まで欲しいと。私は私のものなのに・・・でもその言葉に喜んでる自分も確かに存在するからやはり困ってしまう。

現在 網タイツ参上

カツカツカツカツカツ・・・
小気味いい足音が廊下に響く。

「速報だけど、例の集団食中毒、原因はカンピロバクター、汚染源は鶏肉で確定みたい。卸売り業者も特定できたようね。検査ラッシュもじきに収まるでしょうけど、ちょっと数が多すぎるわ。他部署から何人が引つ張ってこれないかしら」

朝一で届いたFAXにすばやく目を通すと、おがわみせい織川京は横に並んで歩いている川田憲一かわだけんいちにFAXをいささか乱暴に押し付けた。

「マクロ微生物研究センターの廊下を、2人の研究員が足早に歩く。部長に確認しておきます。」

慣れたもので、川田は一枚も落とさずに受け取りクリップで留め直す。

「川田君、よろしく。あと、私今日の午後、紅林食品加工での食品衛生講習があるから外出ね。そのまま直帰するから何かあったら携帯へおねがい。」

そのまま京は目当てのドアをスライドさせ、中へ入っていく。こじんまりとした事務フロアは、朝礼開始前には壁に寄りかかって話をする社員でいつも賑やかである。

しかし、今日は2、3箇所おがわみせいの机に寄り集まり、いつもと違う雰囲気であった。

話の内容は今まで京が話していた集団食中毒についてのようだ。それぞれが持っている情報を共有しているのが聞き取れる。

ドア近くのパソコンに寄り集まっている中の一人、斉藤主任が京たちおがわみせいに気付いた。

「織川、川田おはよう。例の食中毒だけど・・・」

京に顔を向けた斉藤主任の声がフェードアウトする。大きい目もより見開いて京から目を離さず、上から下へさらに下から上・
・まで上がらずに足に視線を固定させる。

「お前なんだそれ！」

その悲鳴のような上ずった声に反応した人間が京のほうへ顔を向け、斉藤主任と同じように目線を上下、さらに足に固定させてしま
う。

ごっくん。

一瞬の静寂の中、だれかの、もしかしたらそこにいる男性すべてか
もしれない、生唾を飲み込む音が事務フロアに響いた、気がした。
京は臆することも悪びれることなく、そんな皆を一通り見渡す。

京の斜め後ろにいた川田はため息をつき、京の前に立つ。すぐに
男性陣から野次が飛ぶ。

「何で隠すんだ」

「もつと見せる」

「朝からいいもん見た」

「きゃあ、やつぱきれい」

数少ない女性からも黄色い声上がり、女性達はそのまま勢い良く
京に迫ってくる。

「だから言ったじゃないですか」

川田がボソツと京だけに聞こえるようにつぶやく。

「・・・不可抗力なんだつてば」

今朝起きてから繰り広げられたかなり痛い攻防戦の記憶が甦り、京
はこれに関しては本当に疲れたと額に手を当ててがっくりと肩を落
とす。

一瞬の後、京は女性陣に取り囲まれていた。

身の危険を感じ、川田は押し出されるように2 3歩京から離れた
め息をつくと、さきほど手渡されたFAXに目を落とす。

「みんな、おはよう」。朝礼始めるよ」。

一種異様な雰囲気にも包まれた事務フロアに、のんびりとした声が響く。

声の主、上条専務が女性陣にもあいさつをしようとして、隙間から見える京を視界に入れると、流れるように一度前を向いてからすばやくもう一度京に目を向ける。足も止まっていた。

「・・・京くん、ミニスカートはちよつと・・・刺激が」

「タイトですが、ミニではありません」

無然とした態度で、すばやく返事を返す。膝が出ている時点でアウトなのか。ほとんどの女性社員はひざを出してるのに、と頭の中でつぶやけば京の眼光が強くなる。

今まで一度も京からそんなキツイ視線を浴びたことのなかった上条専務はちよつと焦ったように、しかし皆が視線を止めた問題点を言及することを止めない。

「なんで黒・・・しかも網タイツ・・・」

「『ストッキングやタイツはベージュまたは黒を着用のこと。素足、色柄物は禁止。』ですよね。服装規定には網タイツ禁止とは書いていませんが・・・すいません。手持ちが無くて時間も無かったので。昼にコンビニへ行って買い換えませす」

織川はつい八つ当たりめいたセリフを言った自分を反省するように、すぐ言葉を添える。本当は出来れば今すぐコンビニに行きたいが、そうもいかないだろう。

えー！やだー！！という声が主に女性陣から、

えー。と落胆したような声も聞こえるような気がしたが、どちらも京は完全無視だ。

「・・・じゃあ、朝礼にしようか。あ、そうだ織川くんもこっちに来て」

上条専務は、さらに強くなった京の眼光にたじたじとしながら薄く

なった頭頂部を撫で回し、なんとか気持ちを落ち着け目を京の足から引き離してフロア中央に向かうと、思い出したように京を手招いた。

今まで一度も留めたことなどなかった白衣の前ボタンを丁寧にはめ、7割がた足が隠れた状態で京は前に出る。とたん、またしても「えー」というブーイングのような声が上がった。京の眉間に皺が寄り、額に青筋まで立っているような雰囲気、事務フロアにいる社員は口をつぐんだ。

朝礼を始める前に、すでに残業までこなしたような疲労感に包まれた京であった。

過去 中3ー生足デビュー（前書き）

もしかしたらご不快に感じる方が居られるかもしれません。その時は速やかに他の楽しい小説を読みに行ってくださいませよう、お願い申し上げます。

過去 中3ー生足デビュ―

京は背が172cmあり、腰の位置も高い。スレンダーで、いわゆるモデル体型だ。本人は小さい胸と張りのあるヒップのバランスが悪いと下半身を気にしているが、周りから見れば贅沢な悩みだ。当然ながら足も長い。そして、その“足”こそが、京の悩みの種であった。

中学3年の夏から、28歳の現在に至るまで、彼女の周りには「足フェチ」を自称してはばからない男女が常時存在していたのである。

中学・高校と陸上競技を行っていた京の足は、あまり筋肉質にはならずほどよく筋肉のついた細い足をしていた。

運動をまったくしなくて細い、いわゆる「サリーちゃんの足」とは違う。

母に言われて日焼け止めをつけるようにしていたので焼けすぎず、かといって白すぎない健康的な足に部活で走りこんで浮かび上がった汗が流れる。

中学3年。京は3000mおよび1万mの選手として、最後の県大会出場に向けて地区予選前の練習をしていた。そんな7月のある日のことだった。

部活を終え、ほとんどの部員が足早に水場へ向かう。京は混雑を避けるためにちよつと時間をずらそうと水場にいく途中で足を止め、体から吹き出る汗を手持ちのタオルでぬぐっていく。顔、首、腕。そして足を拭こうと近くにあるベンチに足をかけかかんだ時、それは聞こえた。

「ぎゅっ。」

はっとして、かがんだまま顔を上げると、そこにはさっきまで一緒に部活で汗を流していたと思われる同学年の男子数人とマネージャの早苗さなえかおる番が立っていた。

皆の視線が京の足に集中している。痛いほどだ。どちらも時間が止まったかのように固まっていた。京は得体の知れない雰囲気きんぎょに身動きが取れずにいた。

汗はその間も止まることなく吹き出し、流れる。早苗が意を決したように京に声をかけた。

「あの・・・汗、拭こうか？」

「え？」

早苗が一步一步慎重に歩み寄る。獲物を狙うハンターのように。そして、京の足の傍に屈むと、その手にもっていたタオルで、そーつとふくらはぎを流れる汗をぬぐう。

「・・・かおるちゃん？」

京は動かない。いや、動けなかった。早苗の手が震えているのが判るからか。

「きれいな足・・・。触りたい、ね、ちよつとだけ。いい？」

そつと足をかけると（京に、では無かったと断言できる）震える手で、そつと今拭いたふくらはぎに手を当て、軽くなでる。

ぞわぞわっ

京の背筋を冷たいものが走った。意味がわからない、恐怖。

何分も経ったような気がしたが、たぶん5秒くらいだろう。恍惚とした表情でなでた手を自分の口に持っていき、腰砕けになりながら早苗が退いた。

「ありがとう。この手は一生洗わないから！このタオルも！」

と、まるでアイドルと握手できたファンのような反応を京に向けな

がら。

「えっ・・・と」

どう反応したらいいのだろう。上半身を起こしながらベンチにかけていた片足もおろす。しかし脳細胞は沈黙を保ったままである。そこから京は更なる窮地に陥る。

「俺も。汗拭いてやるよ。」

と、いつの間にか同じ陸上部の恩田と長崎が左右に分かれて京の足元にひざまづき、恩田はふともも、長崎は膝裏と膝頭を丁寧にぬぐう。そして、早苗と同じように自分がぬぐった箇所を宝物を触るように優しくなでたのだ。震えそうになり、奥歯をかみ締める。

そのあともその奇妙な光景は続いた。陸上部だけだと思っていた男子の後にサッカー部部長の福田さんと副部長の伊東くん、剣道部主将の大熊くんと合計5人の男子に満遍なく足の汗を拭われ、なでられた。

京はそのままその場にしゃがみこみたい気分だったが、次に何をされるかわからない恐怖に支えられ、かろうじて立ったままでいた。

「何なの・・・。」

その場にいた全員がその儀式(?)を終え、口々にありがとうと言ってタオルに顔をうずめたり、自分の手をなめたりしている異様な光景に、やっと出た疑問を問う声は擦れていた。

「私達、ファンクラブなの」
何の。

「ここにいる皆、織川さんの足に惚れ込んだんだ。」

それがタイムや脚力など常識的に考えられる意味でないことは判った。ちよつと涙が出そうだ。

「今年の春くらいまでは普通に足がきれいだな、位だったんだけど・・・。」

「夏になって、短パンになってからがやばかった。」

陸上部のユニフォームなんです。恩田君も長崎君も同じ格好しているのに。

「暑くなってきた、頻繁に汗を掻くようになって。一度見たら忘れられないんだ。夢にまで出てきちゃうし、ずっと見ていたい、だんだん触りたいと思うようになってきて、しまいには嘗め回したくて頭がおかしくなりそうなんだ。」

大熊君。私の頭がおかしくなりそうです。

「同じように思ってる奴、たぶんイツパイいるぞ。7月から校庭を見学してるやつ増えただろ？織川さんの足がだれかに襲われるんじゃないかとひやひやしっぱなしたったぜ。」

なあ、と同意を求める福田君に伊東君もそうそう、と合槌を打っている。

私はこの状況にひやひやしっぱなしです。

「だから、ファンクラブ作ったの。で、私達は親衛隊。親衛隊として京の足を守る代わりに、今日みたいに触らせて欲しいの。ほんのたまにでいいの。ちょっとだけ。ね。」

真っ赤な顔で私の足に触った手を頬に寄せ、とても幸せそうな顔をする早苗ちゃん。あなた普段からふざけた振りして足触ってくるじゃないですか。興奮しているのが怖くて最近近寄らないようにしていたのに、近づかないで欲しいです。

「そうそう。そうしてくれたら、自制できるから。」

「ちゃんと守るし。」

いやだ、だめだ、やめてくれ、そういいたかった。

・・・しかし、最近の強い視線の原因が自分の足であることに、なぜか納得してしまった。すれ違いざまにスカートを捲られたり、わざと近づいてきて足を触られることが一日に何回も発生するようになり、夏だからだろうかと無理矢理自分を納得させ、なるべく男子

に近づかないように警戒するようになっていた矢先のこの爆弾発言の連発。生きた心地がしないとはこういうことなのだろうか。中には女子も触ってきていたが……。

休日に家族と一緒に電車に乗っていれば痴漢に遭遇するしで、ちょっとした引きこもりになりそうな鬱々とした気持ち振り払うように部活にも熱が入っていたのだが、それはすべて裏目に出ているだろうか。そう言われているような気がする。京の困惑は深まるばかりだ。

「織川さんを待ち伏せして捕まえようかって話してる野郎どももいたぞ。潰しといたけど。」

なあ、とサッカー部の恩田君と長崎君が言つと、

「俺も、灸を据えておいた。」

と剣道部主将の大熊君も竹刀を振るうまねをする。

すでに守られていたのか。

全員がじーっと京の返事をまっっている。ここで首を横に振れば、明日からたくさんのアプローチに自分ひとりで対応しなければいけなくなるのだろうか。結論は早々に出た。

一人は無理。

京に出来ることは首を縦に振ることだけだった。

こうして中学生生活が終わるまでは親衛隊の男子6人女子1人にまわりを固められ、ちょっと嫌な思いもしたが、おおむね平和に終わった。

過去 中3ー生足デビュー（後書き）

足フェチの皆さんごめんなさい。

誇大表現になってるかと思えます。100%私の妄想です。ご容赦を・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6390u/>

ささやかな願い

2011年10月9日01時03分発行